

# 向井潤吉の素描

民家・旅路のあかし



十二  
十  
和室寺新地落  
潤吉

室生寺の村(奈良県宇陀郡室生村) 1961年



不詳(笠と農夫) 1955年頃

1999年1月5日[火]—3月28日[日]

開館時間=午前10時—午後6時(入館は5時30分まで)  
休館日=毎週月曜日(ただし祝日と重なった場合は翌日)  
観覧料=一般200円(160円) 大学生150円(120円) 中小生100円(80円)  
65歳以上及び障害者の方100円(80円) (内容は20名以上の団体料金)

世田谷美術館分館  
向井潤吉アトリエ館

向井潤吉先生のライフワークとして知られる、草屋根の民家を描いた膨大な作品の数々は、民家とそれをとりまく風土、自然の景色が混然一体となった表現によって、作品を観る人々の心の中に、静かな郷愁の想いを誘いおこしてくれます。

戦争中には陸軍報道班員としてフィリピン、ビルマなどの戦地に従軍し、戦争記録画の制作にあっていた向井先生は、戦争という強大で虚妄な暴力に蹂躪される人と生活、そして荒廃していく風土を目の当たりにし、ある種の感慨を心中に抱かれるようになりました。

向井先生が民家作品を描きはじめたのは、昭和20年、終戦後も間もないその年の晩秋のことでした。それは、「雨」と題された、新潟県川口村で制作された作品で、あたかも当時の世相を映したかのように、暗澹とした色彩で描かれたものでした。

画家としての向井先生にとって、従軍という体験と、その後に制作が始まる民家作品とのあいだには、分ち難い関係があったのではないのでしょうか。

日本の伝統的な住宅である草屋根の民家は、戦後の復興とともにその姿を消して行き、人々の生活もまた、さまざまに変貌をとげてきました。戦後の復興から高度経済成長へとつらなる社会状況は目まぐるしく変遷し、そのなかで、私たちは多くの日本の原風景を失ってきたように思えます。

向井先生の長年にわたる民家をモチーフとした画業は、ある意味で、こうした社会の動向とは異なる方向性をもっていたと言えますが、写実表現を心底より探求し、一見平凡とも見えるモチーフをとらえ続けてきたことは、戦後美術の動向の中でも、特筆すべきものがあろうかと思えます。

このたびの展覧会では、制作の現場となった各地において描かれた素描作品に焦点をあてて、ご紹介いたします。それぞれの取材地の風と光の中で描かれた作品の数々からは、民家やそれぞれの風土に向けられた、向井先生の暖かく、そして真摯な眼差しを感じることができると思います。そして、こうした作品の数々は、民家を求め続けた先生の長い旅路のあかしであらうかと思えます。

# 向井潤吉の素描

## 民家・旅路のあかし



晩春田麦俣 (山形県東田川郡朝日村田麦俣) 1966年



壮大な長屋門 (茨城県) 1966年



ヨーロッパ風景 (キオツジャ) 1959~60年



ヨーロッパ風景 (プロバンの宿にて) 1959~60年



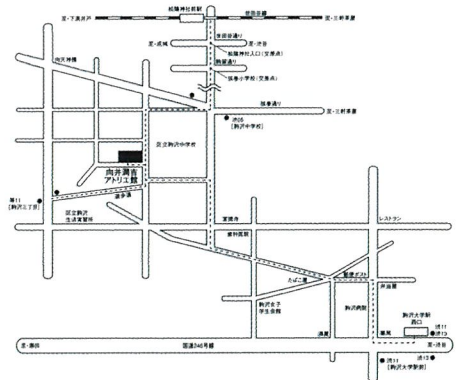
不詳 (食事風景) 1955年頃



早春の水路 (埼玉県川越市新河岸) 1982年



ふもとの老樹 (山梨県北巨摩郡小淵沢町) 1969年



### ●最寄り交通機関のご案内

- 東急新玉川線【駒沢大学】 駅西口 下車/徒歩10分
- 東急世田谷線【松陰神社前】 駅 下車/徒歩17分
- 東急バス (渋05) 渋谷～荻巻営業所 【駒沢中学校】 停留所下車/徒歩3分
- 東急バス (等11) 祖師谷折返所～等々力 【駒沢三丁目】 停留所下車/徒歩3分
- 東急バス (渋11) 渋谷～田園調布 【駒沢大学駅前】 停留所下車/徒歩10分
- 東急バス (渋13) 渋谷～砦本駅 【駒沢大学駅前】 停留所下車/徒歩10分

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154-0016 東京都世田谷区砦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581